



Vol. 2, No. 1
1952年1月
倉敷昆蟲同好会

一周年記念号

1952年の始頭に当り

山川 東平

新年おめでとうございます。

昨年一月倉敷同好会として発足してより丁度一周年を向えりよいよ今号より第二巻になったわけなので丁度その間決して平坦な道ばかりではなかったようです。中継会の中心となり実際の推進力となっていた白神昭馬を失ったことは大きな打撃でありました。然し他の熱心なる会員に依りて地味ではありますが一歩一歩その地歩を固め、発足当時の暗中模索の感は次第に薄れ、あらかではあります。光明に近づくところを思い甚だ心強く思っております。

会と共に私達の愛する機関紙“すすむし”もその内容を充実にしました。若新進の方の努力の跡がはつきりうかがえて、願しく思っております。

深谷先生を東京の方へお送りしましたがその為には方向を失う事なく、第二巻を第一巻以上に育て上げたいと思っております。若い人の情熱はうつつたこの会の進展を助るものであります。

1952年 新春

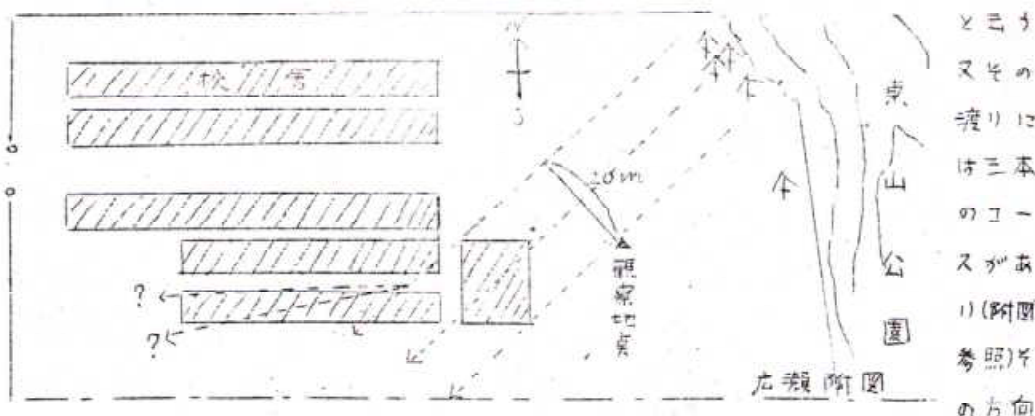


蝶類観察雑録(II)※

セセリの渡り?の観察 廣瀬 義躬

蝶類の“渡り”と言うことは既に古くから特に外口に於てよく知られてゐる事である。今迄に我国でも渡りを観察されたものは モンシロウ、イチモンジセセリ。その他わずかにニミの種に過ぎないがこのことは甚だ興味がある。私の第18-3 1951岡山市門田岡大附属学園に於いてセセリ類の渡りと思ひやる蝶をいくつか観察することを得たので筆を自身の観察ではなく、弟から聞いて知り得た事であるので甚だ不十分な点が多くあるものと思うが、絶然に信用出来る観察であり中にはかなり興味ある事実を観察しているのを参考迄に報告しておく。なお本観察に於ける蝶の種名は採集出来なかつた為にはつきりとはわからず、目録の裏から見て、上記イチモンジセセリであることは確実の概である。以下弟の観察の要旨を簡単に述べる。

観察時刻はA.M.8.30でそれ以前から20分間の観察である。和気は二三日経つと人と同時にこの渡りが見られ他の時刻にはさへともな習性を全然見られなかつた。



はいすれも南西である。少し西の方へ行った個体もあるようであるがはっきりしな。そしてその飛翔する個体を妨害しても決してその進路は変らず。形容すればモノニツカレタと云う風である。観察地点附近の三コースの中約20m位である。飛翔は小さく直線的地上70cm〜3mの高さである。多くは1〜2mの間隔で稀に2匹一語に飛翔(20分間は約2〜300の個体(或いはそれより大)が見られと云うが数はぼつぱりわからない。しかしその後二三日後にも観察されたと云うから多数の個体が飛翔したことになる。

しかしこの観察は然りて不十分な点もあるのであるがこう述べて来ると私が実際想像するような真の渡りではない様に思われるのである。私はまだ真の渡りと云うべきものを観察してない(これはセセリの異常飛翔行動とも言ふべきものか?)。これらについては特に他日の御教示を乞う次第であつて、又今後の観察が望まれるわけである。

※蝶類観察雑録(1)は本誌Vol.1, No.12, P.1 Zephyrus (特にアカシダミ)の前花について〃を当る。



県北の蝶類初発日(但し春季のみ)

蝶類に就いての初発日の調査は余りやつていないが昨年(1951)学校の登下校時或いは採集観察によつて多少得た資料があるのでお知らせします。観察した地域は英田郡林野町、勝田郡壺口村、勝田町です。何か参考になれば、()内は1950年。

アカタテハ	2.22		ベニシジミ	3.27	
モンシロチョウ	3.6	(3.16)	ムラサキシジミ	3.27	
ヤマトシジミ	3.16		アゲハチョウ	4.5	
キチョウ	3.16		ヒメウラナミジャノメ	4.18	(4.15)
ルリタテハ	3.16	(3.23)	リマキチョウ	3.31	(3.23)
テングチョウ	3.17	(3.23)	キマダラヒカゲ	4.21	(4.16)
ルリシジミ	3.27		ユミスジ		(4.15)
ユリバヤ	3.27		ダイミョウセセリ	5.6	
スジグロシロチョウ	3.27		ユジャノメ	5.6	
モンキチョウ	3.27	(3.23)	エチャバナセセリ	5.13(?)	
キタテハ	3.27	(3.17)			



ホオジロアシナガゾウムシの越冬状態

① 1952年1月1日筆者が本同好会の方々と初の採集を試み

た。その日は正月といは、思えぬ暖かでは
思われ、そして吉備郡小黒田より入山
し黒田に向つて山を降つていせ、その
途中 Zephyrus の卵を取るのが目的で
切の小枝を順次監査していた所このホ
オジロアシナガゾウムシ(成)にぶつか
つた次第である。その状態は図の如く
前肢後肢で小枝をしっかりと抱きかゝえ
ていてちよつと見た所まるで抱えた虫の
ようであつた。(近藤 光宏)

火燈火のカミキリ 2, 3

昨 年燈火で採集出来た本科のものの中、幾つかを報告しておきます。

1951年7月3日大原農業研究所の昆

虫室へ塚谷先生とのお話しがあつて行
つた時、夕方帰りに、すでに点燈され
ていた青色螢光誘蛾燈をちよつと見て
まわつたところ、アオスゲカミキリ(*Xy-*
strocera globosa Olivier)が一個体見
れた。先生によると以前にはこゝにタ
カサゴシロカミキリ(*Olenecamptus*
formosanus Pic.)がよく見られたと
のことであつた。もう一つは1951年
7月21日 広島県道後山の山の家によつ
とおちつた野カミキリ、皆んをがぐ
すり纏入つてゐる夜中にしばしば、こ
そとそと起上つて近くの廊下の暗い電
燈をのぞきまわつて、フタツメホリヒゲ
ナガカミキリ(*Urceus bimaculata* Thomson)
センガミキリ(*Dihammus luxuriosus* Bates)ヒ
メゲンナガカミキリ(*Monochamus subfasciatus*
Bates)が一個体づつ結果静止していたの
を得ている。尚夕方風呂へ入つた時と
この燈火でミラホシカミキリ(*Glenea re-*
lictata Pasce), をつかみとつた(小野 栄)



倉敷産スズメガ科目録

青野 孝昭

倉敷にスズメガがどの位居るか現在迄の知見から纏めて見ました。こゝに記録し得るとの13種。未だ調査不充分なものを昔の目録が礎石ともなつて次々と新しい記録を積み重ねて行けたら大変です。種名同定は日本昆虫図鑑(1954)平山氏著原色昆虫図鑑等を参考にしました。

この目録の作製をすゝめられ、沢山の資料を提供して下さいた小野洋氏に感謝します。

Family SPHINGIDAE スズメガ科

1. *Rhagastis mongoliana* BUTLER ビロウドスズメ
黒田で羽化したものを1951年7月16日採集した。
2. *Theretra nessus* DRURY キイロスズメ
8月大原農研の蛍光灯によく飛来する。
3. *T. japonica* DELORZA コスズメ
各所7月下旬に多い
4. *T. oldenlandiae* FABRICIUS セスジスズメ
各所7月下旬に多い
5. *Macroglossum stellatarum* LINNÉ ホウジャク
6, 7月に多い。春にも越冬したものが見られる。晝活動する。
6. *Gurelca masuriensis sangaica* BUTLER ヒメホウジャク
7月頃山岡で見掛ける。晝活動。黒田・鶴形山等
7. *Cephonodes hylas* LINNÉ オオスカサバ
6月から8月下旬頃迄日量殆んどに活動しているのが見られる
8. *Smerinthus planus* WALKER ウチスズメ
田・上方面に多い
9. *Marumba gaschkewitschi echeiphron* BOISDUVAL モモスズメ
6月8月に多い。廻津に沢山いる。櫻並木があるところだらう
10. *M. sperchius* MENETRIES クチバースズメ
鶴形山で1951年7月28日に小野洋氏により1個体得られた。
11. *Psilogramma increta* WALKER シモフリスズメ
8月、旭町で一頭採られている。

12. *Herse convolvuli* LINNÉ

エビガラズズメ

8月

13. *Acherontia styx crathis* ROTHSCHILD et JORDAN メンガタズズメ

6月



▲ 日時	昭和二十七年四月中旬	(発表時間一人十分間)
▲ 申込	昭和二十七年三月十五日	(発表要旨二十部提出)
▲ 資格	小学校、中学校、高等学校の学徒に限る	

第四回学徒博物コンクール

倉敷市大原農業研究所内
主催 岡山博物同好会
会長 佐藤 清明

▲ 内容	動物植物地学に関する探創的な研究
▲ 審査	岡山博物同好会の顧問十栄博士に依頼す
▲ 賞金	一万円最高賞に大原賞を贈る副賞多し

(詳細を照会)

倉敷附近新昆虫採集地開拓論と候補地

廣瀬 義躬

本誌12月に古屋野さんよりこの方面のことを論じた文があったが私も至極同意であって実際それは我々が実に深く痛感しているところである。1951年は特にそうであって近年倉敷附近の採集地として随一を誇る清音村黒田も竹採や乱獲等で実に昆虫の数少く種類の中からはヒョウモンチョウの類等は目立った。又甲虫も少なくなった。倉敷も昆虫をやる人が多くなったのは大へん結構なことであるがちゃんと採集ばかりでずに生態観察も行つて欲しいと思う。いたづらな乱獲は今後絶対にうきみないものである。特に年少の諸君に望む次第である。それはそれ

としてこれはこの問題とどう解決するかと言えば先は吉尾野さんの提議した通り新昆虫採集地開拓に求めるより他に方法はないのかある。たけと云、ても耳少の認事などはこの附近を月毎に開拓するわけでもない。て見事がすむさおねると思うので他の人々の為にもこゝに私が従来考えていた私の知る限りの倉敷附近新開拓地候補地と言ったものを述べてみたい。先が倉敷附近を東西南北に分けて述べてみるには倉敷市街より一里陸二里で行けるところは、として述べる。

I) 東部 羽島山、福富山、帯江等よく開拓されていて余り開拓する余地がないが帯江より、と程く中左附近に入ってみたらどうだろう。そして期待出来る。

II) 西部 西は東が開拓の余地がある。多少遠いが求めるとすれば高梁川西岸である。100米前後の山もあるのかそれに地域が広く面白いものと思う。又同じ二万村でもずっと北の附近の所川が高梁川に流れこんでいる附近、正二万と呼ばれる地域は面白いという話も聞く。たまたま行ってみる必要がある。その他柳井原、附近船越と云、北に入ると左附近等がある。

III) 南部 当地域は前からよく話題にあげたところであって松類が多いが、少し足らないが有望な地が多い。浦田山附近(100m)のあたりには面白い南方の森があるがとれさうなところ。附近種松山(258)には名の通り松が多いので期待出来る。一寸遠いが見島郡郷内村北部タコ山(231)龍毛山(184)附近は楠葉樹林が黒田の敷地もありなから、有望地である見島半島調査のホーサとして今年はずむ採集を行いたい地である。(宇野線彦崎駅より往復約10km)

IV) 北部 黒田福山等は周知の通りであるが案外調査されていなければ附近の野郎山(244)と吉地附近である。その他目ぼくは、として北東部の仁牛堂山(224)附近位のものであろう。総じて今後この地域を開拓するかと云えば結局西部南部と言うことになる。しかし又ここが昆虫の宝庫にいたることを以て乱獲しては困る。とばかり倉敷附近は昆虫は少くそれを無理として探すところのが、それを無理な話である。この倉敷附近のとこをいく歩いたところを珍らしいものを探るはず得ようと思えば県北部の背嶺山脈は足るのけさねがある。のである。文の冗長はおゆるしの程を。



原稿募集 !!

「すむい」の原稿を募集します。
 本報は週刊誌で、毎月5日、

1951年の倉敷昆虫同好会回顧

小野 洋

このまゝで本会が可成りしい産声をあげたのはほんの一年ばかり前で、
 小まらずと以前からお互に是非作らねば、と思つてはいたのだから……その意願
 がやゝと當時になされたためである。これの草案と本確約に付られたのは丁度今
 から一年前(1951年)月3日の午後、私の家に青野、友野、白神、三代が来て
 こられて、ユタリと暖をとリつつ話したのが最初である。次にその日の1ヶ月に
 今度は左様、小野君、西代と加えられた人(山川東平先生)の宅を訪れ、ほろほろと
 増かりエエかワカた。猫とたわむれながら、驚くべき高速度で見事に、しかも巧
 みに次々と定められ、あらゆる事柄はこが日、その場でほとんど決定された。種
 れぞれ云々していたが、比較的近くは居ながら、お互に知識標本の交換や意見を研
 究の発展の材料を持ち、それと互に村園を構えることは実に確実で、偉大
 なる標本であった。それがこゝに等が一致団結して立派な会が結成されたことは我
 らのたいに喜んであまりあることであつた。月刊会誌「すずむし」Vol.1, No.1が発行
 されたのは、この時からわずかし後のことである。会誌の編集には原則として4
 人の編集員があたり印刷は1人1ヶ月が1冊まわりで行ふこととなつたが、これ
 は各人の暑氣盛つた様で皆んな一考一考夏休をとつて担当し、特色あるものとな
 ったのである。「すずむし」という名前、又昆虫短編集「おとしぶみ」という名前
 是れ等が朴実に面白くそのお目んずも好適だと思つてゐる。No.1はこうして
 はなばなしく登場した。と云つて本号は筆者の印刷であまり見映えのしないもの
 であるが、源谷先生の巻頭画と山川先生の挨拶の言葉が初夏を飾つてゐる。「お
 としぶみ」は溢れんばかりの大盛況をきたし、まるで静かに満ちて貯えられていた
 水が急に堤を切つてどつとばかり溢れ出した様で、今まで皆人を悶えていたこ
 ういう存報がこの時とばかり飛出してかりわいと賑わしてあり、これを読んで
 いると興味のうきまを知らなかつた。こうして2号3号4号……と概して定期的に読者に
 発行された。これらの内容は1ヶ月2年、年頭には発行せられた総目録に見られる
 通りで、極めて多くのバリエイティに富んだものでいろいろな報文と共に随分と
 甚だしい。紙面の都合で今それらを一つ一つ取上げて見るわけには行かないので、
 省略してゐるが、4月から6月上旬までは全としてではないが、ゲルマーで
 吸集した湯原、神奈川等の採集地をとり、又近郊への採集は毎日曜の如く誰
 かの出勤が見られた程でその活動は、はなばなしいものであつた。時は6月20
 日には源谷先生を御案内して島田の蝶と調査した。この間観形山やのカミキリ、

12月2日江陰から例祭で中々亭へ、左明山博物同好会へ出掛くと起恩講演会があり、参加した。

更12月26日午後1時から大原康研員先生に懇談談話会が実施された。三井の黒田祐一先生も参加下さって、採集地案内、採集記録は花下咲水で、それは巨匠に関するお話等あり、その際本年10月伊豆半島の昆虫調査課題とすること、年刊雑誌の名称は「~~伊豆半島の昆虫調査~~」とすることなどがとり決められ偏快は終った。10月には原稿も多く集り筆巻の印刷で16頁に達した。これでVol.1完成したわけであるが全頁ともかなり増えた系、最近は何地からの入会がよくあるようになつた。『すずむい』と「やっ」と、耳をこつたばかりで、これからである。近頃近郊への冬期採集も盛んな様でウミナミササリ幼虫とされている。皆さん春（同近にはササ）ていさう。準備と工夫に今年も大いに研究に頑張ろうではありませんか。最後はこの論文を結ぶにあたり、本年が倉敷昆虫同好会にとつて良い年でありましたことをお祈りしておきます。



姓名	姓	名	任	所	学校及口職業
43	友	杉和男			大學教育学部 (2)
44	謙	平兼治			中学校 (1)
45	安	東瑞夫			高等學校 (3)



附 刀口

本号2頁の東北の探検紀の著者は「安東瑞夫」なり印刷者の手落で切落した事と誤考と誤考には本館が思ふ事

